



沖縄県公文書館写真展

アメリカが撮った戦争



第32軍の創設～沖縄決戦の準備

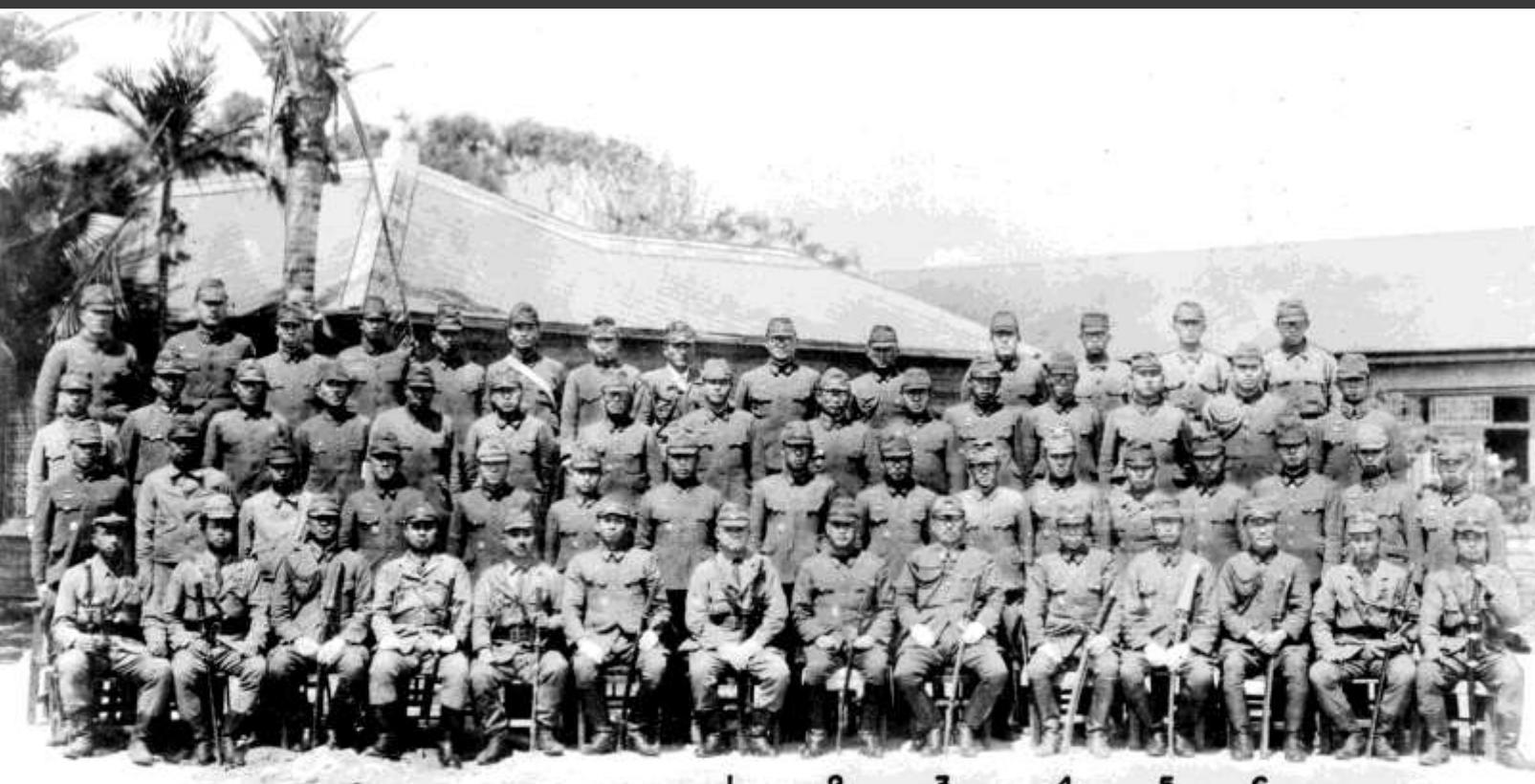
1941年12月、日本軍はマレー半島（英領）とハイチ真珠湾（米領）を攻撃し、米英などの連合国軍と戦う太平洋戦争がはじまります。その後、戦争が進むにつれて日本軍は、南西諸島方面の防衛強化に取り組み※、1944年3月22日に第32軍（沖縄守備隊）を創設します。また、4月10日には海軍の沖縄方面根拠地隊を編制し、同時に飛行場や陣地壕の構築を急いで、やがて来る沖縄決戦に備えます。

※『戦史叢書』によると、戦前の沖縄には防衛に関する施策がほとんど行われず、本格的な軍隊の駐屯や軍事施設もありませんでした。

第32軍守備範囲 概略図



第32軍の集合写真（1945年2月）



原本写真説明文の訳

- 1.大田実海軍中将 2.牛島満第32軍司令官 3.長勇第32軍参謀長
- 4.金山均歩兵第89連隊長 5.北郷格郎歩兵第32連隊長 6.八原博通高級参謀



サイパン島に米軍上陸～もう一つの沖縄戦

開戦後、ミッドウェー海戦やガダルカナル島の戦いで敗北し、次第に劣勢になった日本軍は、1943年9月末に「絶対国防圏」を定めます。翌年6月15日には、絶対国防圏の一角で、日本占領下にあったサイパン島に米軍が上陸し（続いてグアム島やテニアン島にも上陸）、激戦の末に占領されます。

そして、この地域を占領した米軍はすぐに飛行場建設を始め、日本の主要都市を空爆圏内に收めます。

サイパン島やテニアン島には、戦前から多くの沖縄出身者が移住し、この戦いで犠牲になったことから「もう一つの沖縄戦」と言われています。



サイパン島に上陸する米軍部隊（1944年）



原本写真説明文の訳

マリアナ諸島の日本軍拠点サイパン島攻略の最終段階、上陸部隊が最後の掃討作戦として上陸する中、茂みに隠れていた日本軍の狙撃兵が2人の海兵隊員（中央と左）を撃ち、砂浜に倒れ込ませた。



沖縄に10・10空襲～那覇市の壊滅

サイパン島を攻略した米軍は、次のフィリピン攻略作戦の準備として、反撃拠点になりうる南西諸島の日本軍基地を10月10日に空襲します。

沖縄本島では早朝から約10時間わたって空襲され、飛行場、船舶、港湾が標的にされた後、那覇市が集中的に標的にされました。この空襲では焼夷弾※が使用され、投下された那覇市では大火災が起り、市街地が焼け野原に変わりました。

※焼夷弾（しょういだん）は、爆発で破壊する通常の爆弾と異なり、火災を起こす燃料が搭載された投下弾です。この空襲の翌年3月10日の「東京大空襲」でも、焼夷弾が使用されました。



空襲直後の那覇市（1944年10月10日）



原本写真説明文の訳

海軍の空爆後に那覇市の埠頭地区から立ち上がった煙柱は、日本軍にとって凶兆を示している。



沖縄に一斉砲撃～「鉄の暴風」襲来

1945年3月、米軍は沖縄を日本へ侵攻する拠点にするため、沖縄攻略(アイスバーグ)作戦を実行します。

3月23日、米軍は沖縄上陸開始前にあらかじめ日本軍の反撃力を奪うため、艦載機から沖縄地方への空爆を開始します。そして制空権を確保した翌24日からは本島南部への艦砲射撃を開始し、25日には慶良間列島、26日には読谷・嘉手納の飛行場周辺や本島南部などを攻撃します。

この時から終戦までの約3か月間、沖縄各所で多量の砲弾が撃ち込まれました。この様子を暴風にたとえ「鉄の暴風」と言われています。

沖縄本島上陸前に艦砲射撃を行う戦艦コロラド



港川（雄樋川河口）への艦砲射撃（1945年3月24日 八重瀬町）



原本写真説明文の訳

沖縄本島南東部の港川で、標的が炎上している様子。戦艦による一斉射撃と空母艦載機の攻撃によって火災が生じた。



慶良間に米軍上陸 ~沖縄戦の開戦

3月26日、米軍は慶良間列島の阿嘉島、慶留間島、座間味島、外地島、屋嘉比島に続けて上陸し、翌27日には渡嘉敷島へ上陸します。約3か月続く沖縄戦はこの地から始まります。

日本軍は、米軍の上陸開始は沖縄本島だと想定していました。慶良間へ配置していた部隊は本島上陸を背後から襲撃するための水上特攻部隊だけで、慶良間を守る陸上戦対策は行っていませんでした。

逃げ場のない離島での地上戦はより過酷で、渡嘉敷や座間味等では「集団自決」という悲惨事が起きました。

日本本国で初めてアメリカ国旗を掲揚する（外地島）



座間味島上陸に向かう水陸両用車（1945年3月26日）



原本写真説明文の訳

琉球の慶良間列島座間味島への進攻で、浜辺に向かう水陸両用車。



本島に米軍上陸～まさかの「無血上陸」

4月1日、米軍は慶良間列島に続き、沖縄本島の読谷から北谷にまたがる西海岸へ大軍で上陸します。

この時、日本軍は主力部隊を南部方面に配置しており、上陸して来る米軍に対してほとんど反撃しなかったことから、米軍は「無血上陸」を成功させます。

そして、米軍はその日のうちに読谷飛行場と嘉手納飛行場を占領し、北部方面と南部方面に分かれて進攻していきます。

米軍が上陸地点として読谷村周辺の海岸を選んだ理由は、獲得を狙う飛行場に近く、大軍で一挙に上陸し、膨大な軍需品を陸揚げすることができ、上陸地を起点に日本軍を南北に分断して進攻できることでした。

第32軍沖縄本島配備概略図 45年3月末



大軍で上陸する米海兵隊（1945年4月1日）



原本写真説明文の訳

イースター(復活祭)の朝、攻撃開始時刻に海岸から進軍する海兵隊の第1陣。「反撃がないのはエイプリルフールだからなのか」、「出来過ぎた話だ」と海兵隊員が語っていた。



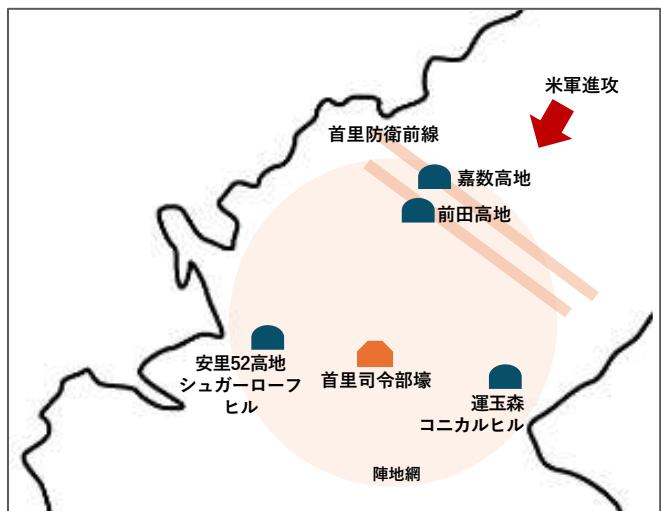
嘉数高地の戦い～首里前線の激闘

南下した米軍は、第32軍司令部がある首里を目指します。そして日本軍が要所に陣地を構える防衛線に到達すると本格的な戦闘が始まります。

4月8日に始まった嘉数高地（宜野湾）での戦いは、日本軍が地の利を活かした戦法で善戦し、米軍の進攻を16日間止めにします。そして日本軍は防衛線を後退させますが、後方にあった前田高地（浦添）での戦いも激戦になります。

この嘉数高地や前田高地で1ヶ月以上続く攻防は、戦力が優る米軍にとって大きな誤算でした。

首里戦線の主な戦激地



米軍が建設した桟橋（1945年4月19日 宜野湾比屋良川）



原本写真説明文の訳

第27歩兵師団による嘉数高地の攻撃のために、工兵大隊が敵の砲火受けながら建設した桟橋。戦車などの重機にも耐えられる。



八重岳の戦い～少年兵達のゲリラ戦

北上した米軍は、本部半島と辺戸岬へ向かいます。

日本軍の本島北部の主陣地は、本部半島の八重岳陣地が唯一で、周りを遊撃戦(ゲリラ戦)を任務とする護郷隊※が守備する手薄な兵力でした。

4月11日、八重岳に進攻してきた米軍と戦闘が始まります。その後、包囲された日本軍は16日に陣地を離れて多野岳方面へ移動し、自給しながらの遊撃戦に移って護郷隊とともに抵抗します。

※護郷隊は招集した10代半ばの地元少年たちで構成され、1944年9月に第32軍指揮下に置かれました。一部の隊員は、組織的戦闘終結後もゲリラ戦を続けます。

本部半島の主陣地と周辺の遊撃拠点



本部半島を制圧した米軍（1945年4月22日）



原本写真説明文の訳

本部半島で。左前方に見える小屋にいた8人の日本兵を殺害。

ここは、沖縄侵攻作戦で熾烈な戦闘が展開された場所である

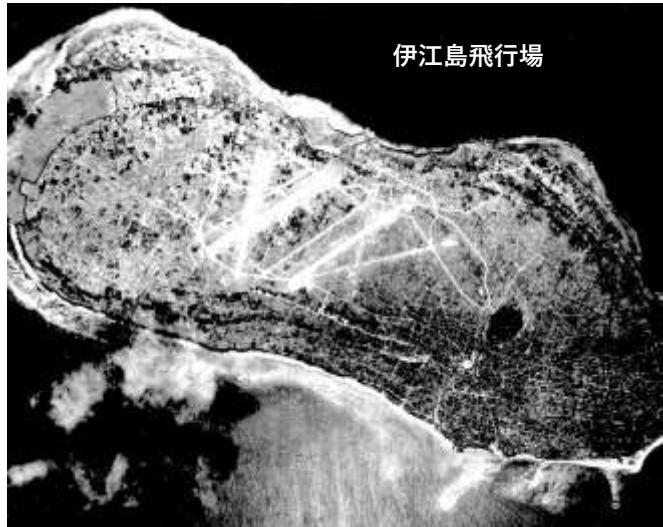


伊江島の戦い～沖縄戦の縮図

4月16日、米軍は日本本土攻略の前線基地にするため、本部半島の西に浮かぶ伊江島に上陸し、当時「東洋一」といわれた伊江島飛行場を占領します。

伊江島では、日本軍の兵士だけでなく、住民も軍と一緒に戦い、多くの犠牲者が出了ました。この戦闘は6日間続き、21日に城山にあった日本軍陣地が陥落し、全島が米軍に占領されます。

『戦史叢書』によると、6日間の戦闘で日本軍の死者は4,700人余、死者の多くは住民で、約1,500人の住民に軍服が支給されたとあります。この惨状は沖縄戦全体を象徴するものとして「沖縄戦の縮図」と言われています。



城山(タッチュウ)の空爆 (1945年4月16日 伊江島)



原本写真説明文の訳

伊江島に対してナパーム弾攻撃が行われているところ。



シュガーローフの戦い～最大級の激戦

局面は南部に戻ります。米軍の進攻が首里司令部に近づくと日米の攻防は一層激しくなります。

首里の正面突破に苦戦していた米軍は、北部を制圧した部隊を首里戦線に投入します。そして5月12日、首里西側にある安里52高地（シュガーローフ・ヒル※）で7日間にわたる壮絶な激戦が繰り広げられ、日米両軍ともに多くの犠牲を出します。

※シュガーローフ・ヒルは、那覇市おもろまちにある安里配水池（白い貯水タンク）がある小高い丘です。



シュガーローフ・ヒルへ向く日本軍対戦車砲 後方は首里方面（1945年5月 那覇市）



原本写真説明文の訳

有名な“シュガーローフ・ヒル”的眺め。手前には日本軍の47ミリ砲がある。ここは沖縄戦で最も血なまぐさい戦いが繰り広げられた場所である。



第32軍南部撤退～決戦から持久戦へ

首里戦線に危機が迫る5月22日、第32軍司令部は少しでも米軍の本土進攻を遅らせるため、首里を最終決戦地としていた作戦を変更し、本島南端へ撤退して残った戦力で戦闘を続ける決断をします。その後、段階的に部隊を撤退させ、30日には司令部を摩文仁へ移します。そして翌31日、撤退後の首里は米軍に占領されます。

第32軍の南部撤退により、住民が戦火を逃れて避難していた南部が戦場になります。結果、多くの住民が巻き込まれて犠牲になりました。



崩壊した首里城〔玉陵〕（1945年5月30日）



原本写真説明文の訳

膝まで泥に埋もれた要塞を占領した後、崩れかけた首里城の壁の下で休憩している米海兵隊員。



小禄半島に米軍上陸～海軍の崩壊

第32軍の摩文仁撤退後、海軍の沖縄方面根拠地隊は撤退せずに、海軍小禄飛行場周辺を守備していました。

6月4日、小禄半島北から上陸した米軍と戦闘になりますが、圧倒的な戦力差で攻略され、12日に司令部の通信は途絶え、13日に大田実司令官が自決して沖縄方面根拠地隊は壊滅しました。

大田司令官は自決前、海軍上官宛てに沖縄戦の実情や県民の献身について電報します。その文末には「沖縄県民かく戦へり 県民に対し後世特別の御高配を賜らんことを」とあります。

小禄半島への米軍上陸



崩壊した海軍司令部壕（1945年6月 豊見城）



原本写真説明文の訳

海軍司令部壕（大田司令官）のある小禄半島東部豊見城地域の高地眺望。

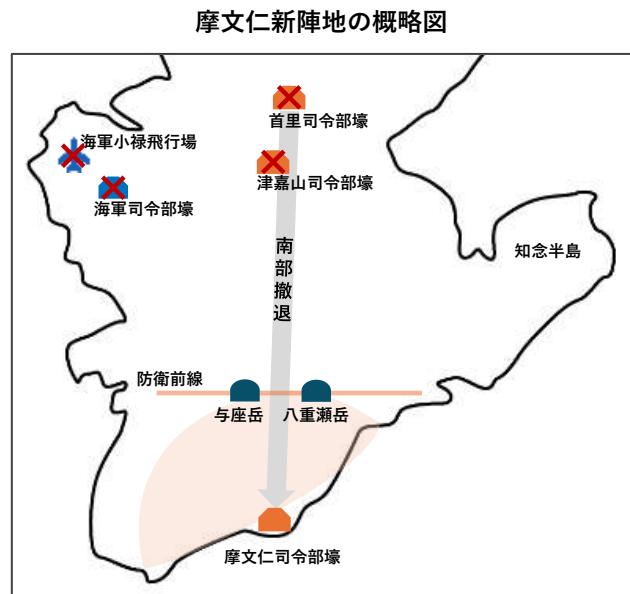
この壕は、兵員室、司令官室、作戦室、厨房等の他、電気や水道を備えた。



摩文仁陣地の戦い ~背水の決戦

南部へ撤退した日本軍は、司令部を摩文仁(89高地)の自然壕に移し、その周辺に新陣地を構えます。司令部前方に八重瀬岳と与座岳を主軸とする防衛線を敷き、後方は岸壁で退路のない、まさに「背水の陣」でした。

撤退する日本軍を追撃してきた米軍は、6月7日から新陣地への本格的な攻撃を開始し、12日に八重瀬岳、17日には与座岳の陣地を攻略します。そして19日には、摩文仁壕周辺に戦車砲撃を行って日本軍を追い詰めます。



富盛の石彫大獅子に隠れる米兵 (1945年6月18日 八重瀬)



原本写真説明文の訳

弾痕の残る一枚岩（富盛の石彫大獅子）は、前方の尾根で敵の行動を監視するアメリカ軍兵士たちの隠れ場所となっている。この戦略上重要な島への侵攻以来、8万人以上の日本兵が殺害されている。



第32軍司令部崩壊～組織的戦闘終結

米軍の猛攻が続く6月19日、第32軍司令部は統一指揮が困難な状況になり、今後は部隊ごとに最後まで戦闘するよう最後の命令を下します。

そして21日、司令部の通信は途絶え、23日未明※に牛島満司令官と長勇参謀長が自決し、第32軍の組織的戦闘は終結します。

※組織的戦闘が終結した6月23日は「慰霊の日」です。しかし当初は22日で、1965年に改正されました。改正当時の立法院会議録には、22日に自決する決意で墓標を書き入れたが、敵軍の状況で実際は23日午前4時半になって自決した、という報告があります。

第32軍摩文仁司令部壕内



牛島司令官と長参謀長の墓（1945年6月28日 摩文仁）



原本写真説明文の訳

摩文仁89高地で、第32軍司令官の牛島満中将と参謀長の長勇中将の墓前に立つ日本人捕虜。写真は心理作戦班の依頼により撮影。



南部掃討作戦～終わらない戦い

第32軍司令部が崩壊した6月23日、米軍は日本軍の残存兵をせん滅する掃討作戦を本島南部で一斉に開始し、壕や洞窟、畠など、残存兵の潜伏場所を火炎放射器や爆弾で焼き払いました。そして7月2日、米軍は日本軍の組織抵抗が終結したものとして沖縄攻略（アイスバーグ）作戦を終了します。

しかし、その後も残存兵による散発的な戦闘は本島各地で続きました。

この掃討戦による犠牲は残存兵だけでなく、戦闘を避けるために洞窟や壕に避難していた住民も巻き込まれて犠牲になりました。



サトウキビ畠での掃討作戦（1945年6月）



原本写真説明文の訳

発煙手榴弾とライフル射撃でサトウキビ畠に潜む日本兵を掃討する海兵隊員。



沖縄戦の降伏調印～沖縄戦の公式終結

8月15日、昭和天皇がラジオからポツダム宣言受諾と終戦を国民に伝えます（玉音放送）。そして9月2日、日本はポツダム宣言を公式に受諾する降伏文書に調印して太平洋戦争は終結します。

一方、終戦後も局地的に戦闘が続いていた沖縄では、9月7日に南西諸島の日本軍代表が越来村に集められ、日本が調印した降伏文書に従い、琉球列島の降伏を求める文書に調印し、沖縄戦は終結します。

同文書には、南西諸島の日本軍を代表し、宮古から納見敏郎中将、奄美から高田利貞陸軍少将と加藤唯男海軍少将が、米軍はジョセフ・スタイルウェル陸軍大将（第2代軍政長官）が署名しました。



日本の降伏文書に署名するニミッツと
その後ろに立つマッカーサー

降伏の指示を受ける日本軍代表団（1945年9月5日）



原本写真説明文の訳

調印式2日前の9月5日、ジョセフ・スタイルウェル大将の司令部でルイス・P・イーリー大佐が先島諸島司令官代表のタガ・トシオ（高田利貞か）少将に降伏条件を読み上げている。



壕からの投降

赤ちゃんを連れて壕
から投降する女性



「白旗の少女」



戦場で保護された子供

壕で見つかり米兵に水を分けてもらう少女



戦闘地域の墓で見つかった2人の子供



戦場からの避難



水陸両用車と並んで幼い弟を背負って避難する少女



収容所へ集団移動

最初に収容された民間人（楚辺収容所）



軍政府が戦略地域から移動させた避難難民



ヤギと一緒に収容所へ

ヤギを引きながら収容地区へ向かう避難民



大切な荷物と家畜を連れて収容所へ



捕虜になった少年兵

労働者として日本軍に
徴用された14才の少年兵

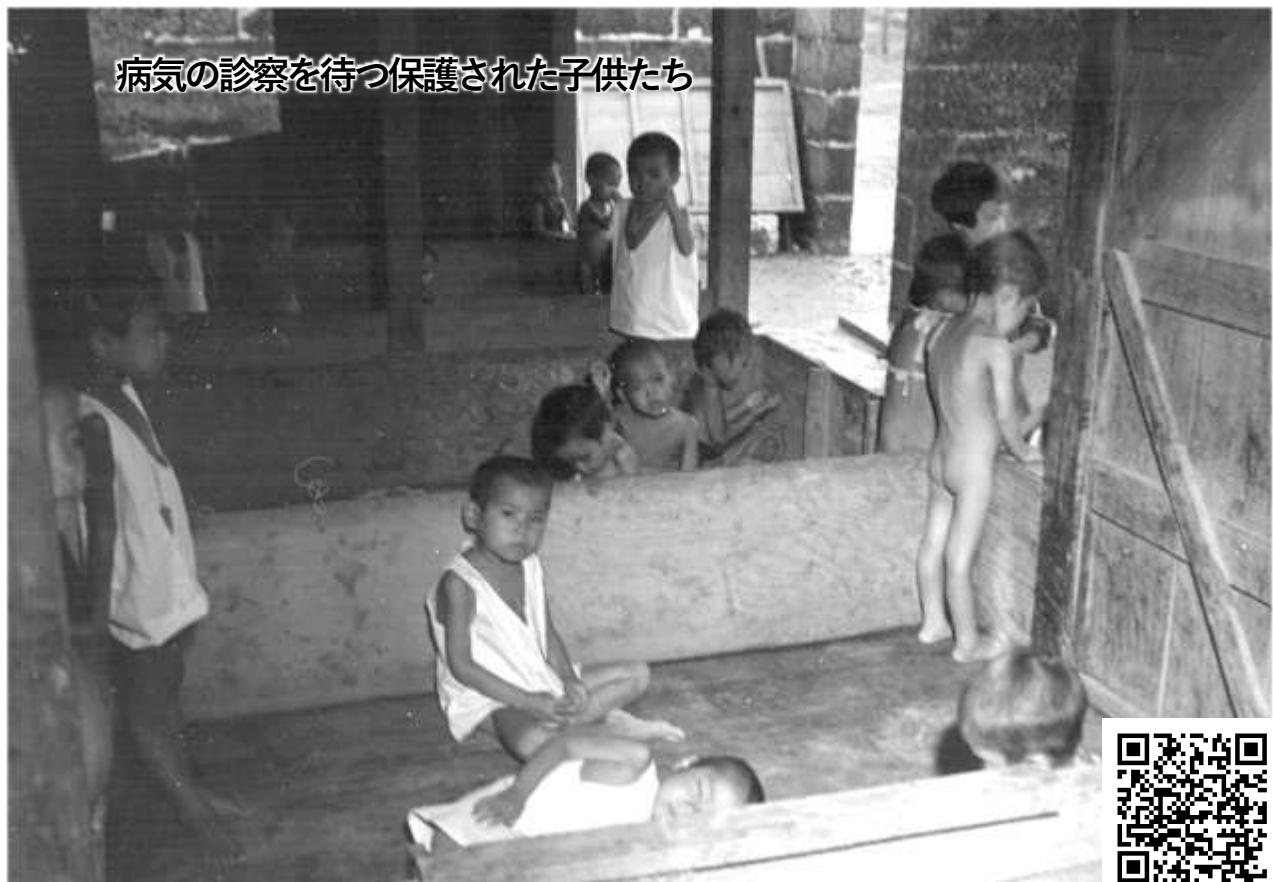


75才、16才、15才の捕虜
嘉手納の収容所



戦争孤児の収容所（コザ孤児院）

病気の診察を待つ保護された子供たち



フェンスの中で目隠し鬼ごっこで遊ぶ子供達



住民の軍作業



久米島で航空通信施設用に護岸を新設する地元民



看護要員と洗濯要員



収容所で家づくり



杵と臼でごはん作り

収穫した稲穂を杵
と臼で脱穀作業



糀殻を臼引きで取り
除く糀摺り作業



荷運びは天秤棒と頭ガンシナー



背中に子どもを背負う母親と娘
原始的な手段で物を運んでいる



坂道で家財道具を運ぶ地元民
(頭にガンシナーで置を運ぶ女性)



もんぺ姿



食料配給所

米の配給券を手にした地元民が配給を受ける（北谷村桑江）



食料配給所の周囲に集まり登録を待つ地元民（名護市久志）



青空教室



銃剣術訓練

学校で教わった銃剣術を練習する小学生



木製ライフルを持つ小学生に
銃剣術を教える米兵



収容所での演芸・芸術

沖縄最大の石川収容所で5月に開かれた演芸会で歌を披露する小学生



沖縄の芸術家・金城安太郎、彼は絵を描くために収容所を出ることを許された



「ギブ・ミー・チョコレート」



さらしおんぶ（包帯の代わりにも使った）



いつでもそばにサトウキビ



水道なしの洗濯（水道は戦争で破壊）



共同井戸と水運び



「アメリカが撮った戦世」展示カタログ

沖縄県公文書館が所蔵する米軍撮影写真をとおして、沖縄戦のあらましや戦時下の住民の様子を次の2部構成で振り返ります。

沖縄戦タイムライン

あの時、沖縄で何があったのか！

沖縄戦の始まりから終わりまで、主要な出来事の経緯とその状況がわかる写真を時系列で紹介します。

戦時生活の光景

あの頃、どんな生活だったのか！

戦場から避難する住民や収容所で生活する住民の様子がわかる写真をトピックごとに紹介します。

※「原本写真説明文の訳」は、原本に記載された英文をもとに要訳したものです。

デジタルアーカイブ「アメリカが撮った沖縄」

掲載写真は、デジタルアーカイブ「アメリカが撮った沖縄」から閲覧できます。写真の他、空中写真や動画も閲覧できます。

沖縄県公文書館



アメリカが撮った沖縄



琉球政府の時代



※アメリカが撮った沖縄は、沖縄県公文書館と琉球政府の時代の関連サイトです。

在米沖縄関係資料収集公開事業

この事業では、米国が沖縄占領期に撮影した写真や動画を米国国立公文書館からデジタル化して収集し、整理・翻訳し、ネット公開しています。収集した写真や動画は、沖縄戦をはじめ当時の様相を視覚的に伝える素材として幅広く活用されています。